

第十八回通常総会 特別講演

日時…平成二十年六月二十五日
場所…札幌市 共済ビル

担い手育成に関する私の提言 — 実践的教育体験から —

酪農学園大学 教職センター 教授 長谷川 豊

ただ今紹介いただきました長谷川と申します。よろしくお願います。このようにたくさんの方がお見えで、しかも農業専門家の皆さんの前で私が出るような雰囲気ではないという感じもしております。しかし与えられた時間ですので、私が日頃考え実践している内容を皆さんに聞いていただき、何かお役に立てていただければ有難いと思っております。

紹介にありましたように、酪農学園大学で農業高校の教員を目指す学生を指導しております。お陰さまで酪農学園大学は全国から学生が来ています。また、北海道の教員採用の他に、僅かですが全国のあっちこっちの県に現役の学生が教員に採用されていますので、楽しみにしております。大学にとっては、教員として送り出すとい

うことはすごく大事なことです。特に私立大学ですと、教員になつて生徒を指導して酪農学園大学に送り込む。これが教員として当たり前の使命だということを学生たちに話しております。彼らが卒業して教員になった時にまた次の学生を送り込んでくれば、教員は勿論、農業の担い手も確保されるのではないかと感じております。

高等学校の校長を退職した後、すぐ農業をやるべく準備をしておりました。その頃、今日も出席しておられますが、道担い手センターの青山事務さんが、当時、道の農業改良課長として「いやあ先生、華麗な変身、頑張つて下さい。」と言って激励して下さいました。ところが私が酪農学園大学にいるものですから「なんだ、違つ

長谷川 豊(はせがわ ゆたか)氏



1941年 当麻町生まれ
1964年 酪農学園大学酪農学部酪農学科卒
北海道高等学校教員に採用
1993年 北海道剣淵高等学校 校長
1996年 北海道標茶高等学校 校長
1998年 北海道岩見沢農業高等学校校長
2002年 酪農学園大学教職センター教授
現在に至る

【主な役職】

農業生産法人有限会社エイチアンドケイ代表取締役
NPO法人風のがっこう 専務理事
NPO法人あぐりびれっじ 理事
文部科学省「目指せスペシャリスト」企画評価会議委員
日本青年奉仕協会評議員
日本ボランティア学習協会常任理事
北海道社会福祉協議会福祉教育専門委員

たのか」と冷やかされました。退職の前の年、大学から話があったのですが、二足の草鞋を履いてしまうと、私の将来の夢である農業の担い手は育たないなということで何回か断ったのです。しかし、岩見沢の校長時代に、「酪農学園大学はどんな教育しているのか」と講演に行ったことがあるんです。というのは、せっかく教員の採用試験に受かって、黒板では授業を上手くやれるが現実に外に出て実験や実習になると何も分からない。それで生徒とトラブルになったり、同僚教員と上手くやっついていかれない。こんな教員を目の当たりにして、これではダメだなと思いました。北海道の農業教員のうち約七割が酪農学園大学の出身なものですから、これは大学の責任だと説教しました。その後、大学から、それでは「お前、やれ」ということになったものですから、二足の草鞋を履いてしまつて、今、農業経営のほうは大赤字で大変です。皆さん方に後ほど幾ばくかの応援を頂くために帽子を回したいと思しますので、お願いします(笑)。

1. 私の農業観

今日は、地域農研の黒澤さんから担い手について話したらいいのではないかということがあったものですから、私が実践している担い手養成についてお話をさせていただきます。日頃私が考えていることは、以下の四つになります。日本の農業はどの方向に進むのだ

ろうか。一つは認定農業者。これは皆さんに言っても釈迦に説法です。すから話はしませんが、もう一つの小規模農業者をどうやって伸ばしていくのかというのが大事ではないかと考えております。それで「新しい食料・農業・農村基本法」も、それに則っているから上手く進んでいくのではないだろうかというようなことを、私は常に考えております。このような二つの方向性があるから農業というのは多面的機能で、非常に大きな役割を果たしているのではないかと思えます。

私が特に考えているのは、農業には教育力があるということです。この教育力を生かすのが、これからの農業の果たす役割ではないかと考えております。ですから小学生だとか幼稚園児、あるいは、中学生や高校生、大学生、こういう人を農村に呼び寄せて、農業体験を通して人間形成をしていくのが一番大切なことではないだろうかと感じております。農村には独特の歴史だとか文化があります。これを今の若い人たちにきちつと話をして、彼らに守っていつてもらうようにしなければならぬのではないかと考えております。その手法としては、ご存じのようにグリーンツーリズムだとか環境を守り育てるとかいろいろありますが、こういうもの全てを使いながら若い人たちを育てる。これはもう絶対に欠かすことが出来ません。

若い頃、昭和四二、四三年の休耕・減反が始まった時に、農協へ

行きまして生徒の家の組合員勘定書「クミカン」を引つ張り出して、生徒と一緒に分析をしました。そうしたら、当時の営農部長さんから、「お前は人のポケットに手を突っ込むのか」と言われて怒られました。しかし、そうでもしなかつたら農業はやれないのではないかとこのことを考えたからです。もう強引に農協に話をしながら経営分析をして、子どもたちに「大変だぞー。一回休耕が始まったら永久に休耕しなければならなくなる」という話をしました。生徒の親たちは、「政治家だとか役所が決めていることだからそんなことにはならない。先生、心配するのは一年か二年だ」という話です。それが今も続いているということです。私は、危機感を抱いて、子どもたちに次の手を打とうと言いました。ところがその時の親父さんは相当年齢が嵩んでおります。ちようど農業機械が流行り始めた頃でした。馬を使っていた農業経営者の人は、当然トラクターなどは乗れません。ですから高校生の自分の子どもに託すわけです。ところがその高校生は朝から晩まで機械に乗せられるわけです。子どもをそんなにまで使っておいて水田が作れなくなったらどうするんだと、やりあいました。「先生、何か良い方法あるか?」「野菜を作りましょう」「そんなモノを作ってどこへ売るのだ」ということでやりとりがありました。最終的には野菜を作らせ、さらに花にも挑戦させました。花をつくり始めた頃は、「こんな根っこもついていないような花を農協に持って来られたって売るところがない」という

ことでした。もちろん根っこがついている鉢花を持って行ったら余計に売れないわけですね（笑）。花なんてどこに売る。という感じですよ。今でこそ農協は大量に扱っていますけれども、その当時は「花なんて冗談じゃない、食ったつてうまくないじゃないか」とみんなに怒られました。しかしそういうことをやって、子どもたちの経営安定を図ろうと考えました。苦労もありましたが非常に面白かったですね。

プロジェクトの巡回指導に朝九時頃行きます。私が行くのを親父さんは待っていて、ちよつとでも雨が降ろうものなら大喜びです。脱穀中少しの雨でも、すぐに小豆にレントをかけ、発動機を止めて、

「先生が来た、今日は雨が降ってるからやめた」と言つて、私と二人で朝九時から座り込んで、焼酎を飲みながら農業談義を交わす。こんなことばかりやつておりました。朝九時から晚十一時くらいまで飲み続ける。私も相当強かつたなあ。と思います。（笑）、その時のおかずがまた素晴らしかつたです。腐りかけの「たくあん」と川ですくつた「アカハラ」をストープの上で焼いて食うんです。焼酎はデンブンスカスを搾つた手作り。これが臭くて臭くて、家へ帰つたらうちの奥さんに家へ入れてもらえないで学校の寄宿舎に泊つたことも何回もありました。

そういう経験をして、高校生や四日クラブ、青年団など若い人たちといろいろなことを考え、実践させてもらいました。道が主催し

ていた農業学園のお手伝いもしましたし、農協青年部、農協婦人部とも仲間になりました。さらには、役場や農協の人も友だちですし、商工会や老人クラブまでいろいろな人と付き合つて、多くの人に育てられて現在の私があると思っています。従つて、私が今持つているものをさらけ出し、若い人たちに託すのが、自分の仕事だと感じています。そう言う意味でこの「新農業・農村基本法」というのは、非常に良いなあと感心して、自分で実践しているということです。

これからの農業は、〃農村と消費者をつなぐ〃そういう役目の人が絶対に必要だと思っています。後ほどスライドで出てきますけれども、今、道庁の赤レンガ前で、多くの賛同する皆さん方にご協力いただいて「北のめぐみ・愛食フェア」というのをやっています。農家の人が、毎月決めた曜日に米や野菜、果物や加工品などを持って来て消費者の人と交流しています。しかし、農家の人が毎回ものを運んできて販売するなんていうことはできません。そんなことやっていましたら自分の家の農業はあがつたりですよ。漁業の人も同じです。それで、代つて売る人が必要ではないかと、思っているんです。実は米パンを作つて売っている人が、二店舗来ています。試食させてもらつたら、味はほとんど二店舗とも小麦粉のパンとかわらないし美味しいのですよ。ところが一軒がものすごく流行るのです。一日で売れて、次の日に仕込んでまた持つてくるという感じなんです。他の一軒のほうは二日間でもようやく売るぐらいです。そこは



愛食フェア

道庁赤れんが前広場は人気があり出店者多い

販売している店員がものすごく上手いんです。私は女将さんだと思って「いやあ、奥さん。貴女の気配り・目配り・話し方はすごいね」と言ったら、奥さんではなかったんです。「私はアルバイトです」と言うのです。「アルバイトでそれだけやれるというのはマネキンですか」と聞いたら、「私はたまたまJTBに勤めていた。結婚して家でブラブラしていたけれども、JTBの職員の時にあちこち旅行業務で歩いたら、北海道の食べ物はずっぴりおいしいことが分かった。それでぜひ応援団になりたい。」ということでした。それで、偶然その人がパン屋さんと出会いバイトを始めたわけです。彼女は本番前にそのパン屋さんに行って、自分でパンを作る手伝いをしていました。そしてどうやってそのパンができるのか、特徴など全部憶えています。それを消費者の方に伝達、説明するわけです。みんな納得して「美味しい、買う、幾ら」という感じなんです。そして、その人と消費者が仲間になって、「今度はいつなの？今度はこういうのを作って欲しい」という話になってくる。

このような生産者と消費者を繋ぐ人、農業の代弁をする人、さらには、今、農家では長沼町などが力を入れている修学旅行生の体験グリーンスクールとでも言うのでしょうか？これなどもすごく大切ですね。しかし、内容を見るとまだまだの感じです。時々顔を出している農家に訪ねました。東北の中学生が三名二日間泊まるそうです。一日目は可愛いと言ってあまり仕事もさせないで、その辺の観

光に連れて行く。次の日は畑の草取りをして貰おうかと。最初は一緒にやっているのですが、そのうち三名に任せてしまい家の方とほとんど一緒に仕事をしていない。そんなことでは、折角中学生や高校生が農業体験に来ているのに、農業の素晴らしさが分からない。

二日間ちやほやして帰えすのなら止めたほうがいいと思うんです。

私はその農家へ行って「やめなさい、こんなの」と言ったのですが、「いやーあ先生、お金もくれるし、手もかからないし、なかなか良いものだな」と言うんです（笑）。そうではなくて、もつと真剣に農業の楽しさ、厳しさ、大切さをきちんと教えるべきだと思います。

そのような体験を受け入れる農家とその子ども達を農家に代わって指導する立場の人も必要で、職業として成り立つと思っています。

これからは、そういうことをやれるような環境を作っていかなければならないのではないかと思います。

以上のように、これからの時代は、消費者と繋ぐ役割が新たな産業となつて生まれるのが農業だと思っています。そのためには、人材を養成する場を考えなければなりません。

それから、問題の新規の参入ですね。最近は一トと称される人がずい分増えてきました。そういう人を農業にという話も出てきております。そういう人たちが農業では、どう受けとめ、受け入れればよいかと言うことが、これからあるのではないかと思っております。

2. 農業との出会い

先ほどもお話しましたように、私から農業を取ったら残りは何にもありません。先祖が屯田兵で愛知県から来て当麻町に入りまして、それからずっと農業と関わってきました。当然私も、農業高校を卒業して酪農学園大学を出て、そして農業高校の教員になったということです。教員になつて赴任したところが道北の「土別市の高校」でした。そこは当時マンモス学校で、農業科もあつたのですが普通科、工業科、商業科、家庭科など全部で一学年十二クラスぐらいありました。四月一日着任。何と農業科が潰れていたんです。農業科が廃科になつたので、「貴方がやる授業はないよ」と言われたんです。これには私もショックでしたね。農業高校の教員になろうと思つて張り切つて行つたら、ダメだということです。それなら「隣の学校へ行かせてください」と言つたら、「四月一日で辞令が出ているから隣の学校も行けない」と。「じゃあ、私は何をやるんですか」と言つたら「他の教科があるよ」と言われて、理科の教員の免許も持つていましたから、「じゃあ、せめて理科をやらせてください」「理科も満杯だ」と。そして、最終的に持たされたのが数学だったんです。農業高校を出て農業の大学の数学ですから、もう推して知るべしですよ（笑）。ところがもつと大変だったのが、普通科の数学を持たされたのです。これには驚きました。先生方は旨いこと

を言うのですよ。「大丈夫だ、一番出来るクラスだから心配するな」と言うんです（笑）。ですから私もその気になって「ああそうですか」。当時は小学区制ですから、何人かは全国の国立大学にも入る。そのクラスを持たされたんですよ。怖いもの知らずですから「やりますよ」という感じだったんです。「大丈夫だよ、易しいよ」と言うものですから、それをうのみにして、ついその気になつてしまつたのです。

一回目の授業に行きました。そして、いきなり立ちんぼです。前任者から引き継ぎで「ここから進めなさい」と言うから、その中身は二次関数でそれこそ高校時代に見たことが有つたのでたいしたこと無いなど気楽に教科書持つて授業に行きました。一〇分間自己紹介して一〇分ほど授業を進めている時、生徒が「先生、その公式はどこからきたんですか」と聞かれたのです。「公式に当てはめてやるんだから、そんなものは関係ない」と言つたら「公式が導かれなかつたら数学はできない」と言われて（笑）、それから困つてしまつて、後の三〇分は立ちんぼなしです。大学を受験する生徒ばかりですから、みんな真剣なんです。農業高校ならそんな先生が居たら大変ですね。騒いでワイワイガヤガヤ収まりがつかなくなる。しかし、彼らは知らない顔して後は内職している。そんなことが三回ぐらいありました。これは酒ばかり飲んでおられんと思つて、慌てて、本気を出して勉強した覚えがあります。しかし人間というのは

おかしなもので、四年間数学の先生をやつたら、分らない数学が分かるようになったのです。そうするといっぱしの数学の先生で、生徒に黒板に出て問題を解かせ「何だ、お前こんなもの分らんのか」と言い出す。こんな事やっていては危険だと思つて、四年間で辞め、後はずっと農業教員をやっております。

先ほど話したとおり私と農業教育の出会い、農業の大転換期「休耕減反」からで、それからずっと農業と関わってきました。そして昭和五〇年代に入つて、農業高校に農家ではない子どもが入り始めました。これもまた大変でした。今でこそ当たり前になりましたけれども、こんなに農家でない子どもが大勢入つてきて、どうするのかと思ひました。特に私は、教頭になつて張り切つて行つた学校は、村立の一クラスの学校だったので。そこは生徒が一クラス五人程度。昼間の季節定時制で全校生が二〇人ぐらいです。教頭だから先頭切つて体育館に行つて始業式の準備をしたのです。そして、先生方に「生徒を呼んでおいで」と言つたら、「教頭、生徒は全員揃つています」と言うのです。体育館に五く六人ずつグループが四つほど居たわけですから。ところが内容が分つてくると楽しみが有りませんでした。その二〇人は全員農業後継者だったので。そんな小さい学校に農業後継者が二〇人いて、毎年五人ぐらいつつ農業者が育つならこんな素晴らしいことはない。凄いことだ。立派な人間に育てようと決意しました。

その年の六月頃です。北海道教育委員会から担当者が来て農業高校を統廃合して私の学校は潰すという話になったのです。五人の生徒に対して教職員が十一名ですから税金の無駄遣いですよ。ですから、これはもう仕方ないかなと思いました。しかし、村立ですから、村長がいいと言わなかったら絶対に潰れないのです。色々話しているうちにその担当者は、来年は生徒を二〇人集めろと言うのです。二〇人集めたら学校は存続する。それから私も夢中になり、まず地元中学校に走りました。中学校には三年生全員で二〇人しかない(笑)。そのうち十五人は普通科志望ですから、残ったのは五人です。これは二〇人集めるのは並大抵ではない大変な事になった。覚悟して、周辺の市町村の中学校に走りました。周辺の市町村にも全て農業高校があります。これはまたダメだ。それで思いついたところが札幌だったので。私の思いつきは当たり前で、その頃、札幌の中学校には生徒が山ほどいましたから、面白かったですね。三〇四校歩いただけで高校の四〇名の定員が満杯になるほどいました。

しかし、学校を末永く持続させるためには、農業だけでは特色がない。まして、農業に全く関係のない子ども達が入ってくる。その子ども達が充実した学校生活を送れるようにしなければならぬ。その為には、学校を変えようということで、とにかく農業を主体にした付加価値をつけた学校にしなければならない。その時に考えた

付加価値が「福祉」だったのです。どうして福祉か、生徒の家をプロジェクトで巡回して歩いた時に、これからは老人が増えるということが分っていました。保育所の代りに各地区に老人ホームをつくつたら良いと役場の人に提案したこともあります。これからの時代福祉教育は絶対にヒット、大丈夫だと密かに考えました。特に、農村地帯、福祉の施設を持った場合には必ず農場と言うか空き地があります。そこで安心・安全な作物を職員や利用者で作らせるということはすごく大事なことで、生徒の就職にも繋がると考えたものですから、農業と福祉を入れた教育にしようと校長や教員を説得。その計画を村長に出しました。そしたら村長は、金が無いと始まったのです。その村長は「大五郎」という名前だったものからです。毎晩大五郎の名の付いた焼酎を持って村長宅を訪ね説得です(笑)。そうしているうちに議長から「教頭、金があるところを知っているぞ。うちは観光地だからいくらでも金はあるんだ、毎年二億ずつ入るんだ」という話を聞いたのです。そのうちの一億をくださいと村長の所に談判しました。

最初は札幌からバスを出そうかと思つたのですが、バスを出したら何もメリットはないですね。それで寮を建ててもらつて寮生の面倒を見ながら学校が始まりました。一、九〇〇人の村民の中に十五才の青春。今まで見たこともない四〇人の軍団が市街地をうろうろするので、村の人もびっくり。そして、生徒は問題児ばかり、中学

校の時乱暴者でみんなが居る教室に入れたら何をしでかすか分らないと校長室通いした者。アトピー、喘息、いじめられているとか、もう両極端なんです。その子たちを農村に連れて来ているいろいろな指導をするわけですから毎日が戦争です。しかし、その子たちの努力が礎になるんですね。ある子は札幌の真駒内駅から、中学校を卒業してすぐにナナハンのバイクを直結でエンジンをかけ盗んできました。中学校を卒業してすぐだから私の責任ではないすよ（笑）。それを道端に隠しておいて、夜中、寮から脱走してバイクを乗りまわす。仲間がいるので一台では足りませんから、農家のバイクはみんな鍵がついたままですから、そーつと持ちだし、朝方返すんです。ところが、やる事は大胆でも考えることが幼稚。ある日の夜中、乗り回しているうちにエンストしたのです。それで燃料タンクの蓋をあけてライターで火をつけて覗いたら、バーンと爆発して国道が真つ黒焦げになったんです（笑）。それだけ悪いことをしたものですから、先生方は当然退学と会議は決まりです。私は、退学させないでこの子たちを育てるぞー。という、信念の下に頑張りました。決まるまでに相当時間を要しましたが会議の進行は教頭である私ですから、思うようになるまで会議を続けるので教員は最後ギブアップです。全員無期停学。しかし、自宅には戻さず農家に預けました。受け入れてくれた農家ではいろいろなことを教えてくれるわけです。「なんだお前、また悪いことしたのか、今度は何やったの？」

なんて言いながら、農家の人は面倒を見てくれます。両親が忙しいのと、家ではインスタントものが殆どで、最初はおばあちゃんが作ったお煮しめなどは食べられませんでした。そういう子どもたちばかりです。ところが農家では「おかず」なんかなくても、話を中心に、みんなとワアワア言いながら生活するところに愛情が伝わってくる。その子は、今、札幌の市場で「はい、ナンボー！」とカギとりをやっている。それが一番悪かったですね。

また、老人ホームにお願いした者も居ます。おじいちゃんおばあちゃん仲間になる。そうすると人の暖かみが分かってくる。二カ月くらい停学にして老人ホームから帰ってきたら、「先生、俺、看護婦になりたい」と言うので「お前、男が看護婦になれるか」と話したんです。そうしたら「おじいちゃんおばあちゃんの看護をしたい」と言うのです。中学校時代は学校に行っても教室に入れませんが、当然、相対評価でオール一です。「お前は中学校の時の成績が一だぞ。そんな成績で看護師の試験なんて受かるはずないだろう」と言っただけですが、目標出来たら勉強するんですよ。そして、卒業した時にはちゃんと看護師養成学校の試験に受かって、今は、札幌の一番大きな老人病院で看護師をやっています。その子達が、新生の農業高校の礎になったから、学校は今でも評判が高く倍率もあります。そういう事例が多くあるから教育というのは、すごく大事だと思うのです。

農家ではない子どもたちの内、何人かは「農業がやりたい」というのがいます。そんな夢ある子を何とかならないかと真剣に考えましたが、残念ながらそれはできませんでした。その時に私も「当分研修に出る、そのうちにまた道が開けるよ」という話をし何人も国内やアメリカの実習にも行かせました。それが教師としてやれることの限界で農業者としての希望を叶えてやれなかつた悔しさが有ります。

大学の教員になって六年半ぐらいですけれども、大学はまた面白いところですよ。ここにも大学の先生がおられると思いますが、大学というところは何でこんなに勝手なことばかりやっているのかなあと思いました。私は高校教員出身ですから、高校は組織がきちんとできています、一つのことをやるのに全員が分かっているなければダメだったんです。ところが大学はそんなこと関係ないですね。自分のことさえやっていけば、後はどうでもいいというような感じばかりですね。反面、良いところもあります。大学の先生というのは高校の先生とまた一味違って、私みたいな者でも社会的には認められる。特に役所の人は、大学の先生に弱いですね。だから結構予算も当たると言う話も聞いたことがあります(笑)。面白い話があちこちから聞こえてきて、私のところまで、企業の人がすごく来てくれます。そしてその人たちからいろいろなものも頂戴しています。それが農業に結びついていくのではないかと期待をしています。

るわけです。

大学の先生は研究することもすごく大事です。私の大学にも百何十人の先生がおられますけれども、研究は真剣になつてやっています。しかし、普及は下手です。自分で研究したら、それがどのように役立つかという普及まで行うのが当然ではないかということです。私は、あまり研究は得意でないものですから、人の研究したものを貰って拡げるのが私の役割だと思っています。人間は全て出会いですよ。その出会いで、助けられて今があると思っています。

3. 私の取り組み

私は、教員をやりながら以上のようなことを考えて、今日まできました。ですから、私のやっている教育や農業が人と結びついて、それが商売に繋がって生かされているのかなと思います。

現在は、NPOだけでは農地を持ってませんので、会社を起こして生産法人をつくって農業経営を行っています。そして人材養成のほうはNPOで取り組むという形をとっています。最終的には新規就農者を育てるのと、農業と繋ぐ職業を起こすということをやっていきたいと考えています。その事を企画して今年農水省に提案してみましたのですが、残念ながら上手くいきませんでした。しかし北海道バージョンのそれをやろうと思つて、作戦を練っております。それは、農業の援農隊です。町の人たちに農業を知ってもらおう。そして

農業を体験してもらおう。今、資格を取るのが流行りですから、体験してきちんと出来た人には級位を与える。そしてその級位がだんだん溜ることによって、その人は農業のマイスターになる。マイスターになったら、いろいろと農業に関わる仕事ができるよというようなことをやりたいなと考えています。

もう一つは、私のところには道の経済部と連携しまして、高等技術学院の園芸科の委託授業をやっております。毎年五月から十月まで、一〇名が私のところへ勉強に来ています。これは有難いですね。そんなに多くはありませんが、いくばくか指導料も頂ける。生徒は失業手当を貰いながら技術を身につける。普通の失業者なら三カ月しか貰えない手当が五カ月間になり、通勤手当までつくんです。その人たちを私のところで労力として活用する。非常に良いことだなと思うので、これは止めたくないと思っています。そしてその人たちが、機会があれば農業者として発展してほしいと思います。

会社は農業生産法人で(有)エイチアンドケイ(伊達市)というのを興していますし、岩見沢市で「ほのぼのふぁーむ」という農場でも研修生を受け入れてやっています。

私が農業高校の教員の時にはまだ景気が良い時で、農場でレタスを栽培し二トントラックに山ほど積んで市場へ行きます。そうしたら二束三文にしかならない。その頃の私は、草花を栽培・指導していました。9cmのポット苗をそのトラックに五、六箱載せて一緒に

出荷します。結果は、レタスよりも、私が作った花のほうが高かったのです。そんな事も有り教え子達に「これからの時代は鉢花が儲かる」と言って教え普及しました。それで北海道中の教え子たちには花作り始めました。そんなこともあり、私自身が農業をやるためには花栽培だということでもハウスをたくさん作り現在に至っております。最初の教え子には「愛知県に行つて勉強してこい」と言つて、五年間修行させいよいよ始まりです。その頃私は、岩見沢の校長だったのですが、私の名前でやるわけにいきません。ですからその子の名前で農業を始めました。

面積は一・七haほど。その他に露地野菜用として三haあります。最初は鉢花を主体にやっていたのですが、今はもうほとんど野菜に切り替えました。特に、昨年の十二月、シクラメンを一〇〇坪三棟作つて、十二月に出荷したのですが暖房費が嵩み六〇万円の収入に對して、暖房費が八六万円も掛かり、大赤字なんです。農協のスタンドから、早く燃料代金払えと言われていますが、無いものは払えない。そんな事もあり、鉢花に見切りをつけました。案の定、今年も春から鉢花は動きません。例えば業者と契約栽培をやります。何時から何の花が必要になるので準備お願いしますと連絡が入ります。それに従つてこちらでも準備して待ちます。ところが一向に連絡が入りません。どうしたかと催促すると少し待ての返事。それが段々長引く。そのうちだんだん暖かくなり、花も終つてしまう。そうする



年間何十人もの短期研修生が訪れる

と今度はモノが悪いと言われる始末です。そんなことで現在の花き部門は大ピンチというところでしょうか。これからはちよつと厳しい時代が続くと思われれます。

今は、育苗ハウス一〇〇坪二棟に直売用のポット花をやっていますが、それ以外は全部トマトにしています。お陰さまでミニトマトのアイコというのを作っていますが、これは結構良い味で認証は取っていませんが化学肥料と農薬は使っていません。一昨年から少しずつやり始めて、東京や札幌のホテルと契約して全部買ってもらっています。

一方、研修の方は、長期のいわゆる担い手候補が五名。短期で、年間だいたい三〇人ぐらい来ます。その他、土曜日・日曜日に一般の人や学生達を受け入れています。露地はカボチャ、ニンニクが今結構人気があります。ワレモコウの切り花も始めました。

流通について少し触れたいと思います。私は高校で教鞭をとり、生徒や地域の人と付き合いの中で厳しき、楽しき、大切さを経験している内に、将来は農業をやるうと決心するようになりました。その為には、作ったら売れる物を若い時から相当考えました。それともう一つ、作ったら買ってくれる人が居なくては経営は成り立たない。そこで、就職する子どもを北海道から、九州まで全国の市場に送り込みました。また、大手スーパーにも就職させました。名古屋とか大阪の市場では「そんな遠く、わざわざ北海道からいらない」

と言われたのですが、「この子は良い子だから何とか就職させてくれ」と言つて、私が連れて行つて依頼しました。その彼らも、今では部長や幹部、カギ取りになっています。そこまでやつておけば私の作つた花や野菜が売れるなと思つたからです。その教え子に「俺がこんなに苦労しているのにおまえの力で何とかしろ！」と今でも怒ります。彼らも、「先生今は、そんな時代でない。どうすれば良いかもがいている。」と、こんな状態です。市場に出してしまつたら赤字になるということです。今までは作れば売れたが、今は作つても売れないということです。ですから先ず、売り先をみつめてからでないかと作れない。先ほども話しましたが、大学にはいろいろな人が来てくれます。そういう人たちと話をしながら、どういう農業がいいのか、どうやれば安定した農業に結びつくのか等教えていただいて、契約に結びつけながらやっています。

今の農業界、非常に立派な個人農家の方がおりますし、グループ化して頑張っている方がたくさんおります。私もいざれそのような経営者にならなければなあと思つていますが、なかなかそこまではいきません。

北海道立太陽の園というのが伊達市にあつたのですが、ついこの間、道立から民間に開放しました。北海道社会福祉事業団がこれを受けました。事業団は障害者の指導はプロですが、農業は全くダメです。私の所に、委託で請け負つてくれないかということで来まし

た。建物が魅力だったので。牛舎、鶏舎等建つてから六年ぐらいですから、まだピカピカなんです。「このピカピカを私が引き受けなかつたらどうなるの」と尋ねると「窓枠に釘を打つておしまいだ」と言うのです。内浦湾や遠くは函館を見渡せるようなロケーションも最高。閉鎖しては勿体ない。やりましよう、引き受けたのですが、失敗ですよ。餌代が高くて高くて、どんどん値上がりします。それともう一つ、将来、若者と障害者が一緒になって助け合いながら牛だとか鶏等を飼育すればこれからの農業のモデルになる。そう考えて若い人を募集しました。ところが障害者も来て一緒に仕事を始めると問題ばかりです。思いもよらず障害者の作業には事業団の職員も一緒に来て、障害者の指導だけでなく、我々の職員にまで口を出す状態で、研修生は仕事が十分にできず約束が違うと一人二人と止められてしまう。最も大切な人間関係の必要性を勉強させられました。

それからもう一つ問題がありました。経営は任されていても事業団の職員は「指導」の意識が先に立つて商品の値段まで口を挟んでくる始末です。彼らは今まで、経営を度外視した障害者の施設だから、そんなにお金儲けしなくてもいいと言う意識が先に立ち卵や牛乳の値段を決めるのにも、安くて地域の人に喜ばれている。という事です。冗談じゃない、うちは経営が掛かっている。損をしてまでやれないと言つて、すつたもんだしていますが最近ようやく落ち着



社会福祉事業団 太陽の園 農場委託
乳牛12頭、平飼い鶏1,000羽
野菜、採草地、デントコーン、牧草地等 10ha

(太陽の園農場)



会社 社長 支援
面積 15ha 野菜 (一部有機認証) 雇用 3名
研修生 3名

(岩見沢市 ほのぼのふぁーむ)



面積 約5ha 野菜・花卉栽培
ハウス面積 10棟、3連棟 合計1,200坪
野菜 トマト、ピーマン、カボチャ、寒締めホウレンソウ
鉢花 シクラメン、ケイカなど

(農業生産法人有限会社エイチアンドケイ農場)

いてきました。それにしても、障害者は素晴らしいということがわかりました。ここで働く人は本当によくやる。牛やニワトリの他に野菜の農場もあります。草などはきれいに取ってくれ、いつもピカピカです。そういう能力がある。彼らのそれを、農業のほうに取り入れるということも大事なことでないかと思って、引き受けています。先ほど言いましたように、経営内容は厳しいので、今年ダメなら来年はやめようと思つていますが、将来自分で農業をやりたい若者は、こういう所へ来れば本当に良い勉強になるのではないかと感じております。

これは岩見沢市栗沢町にある農場、「ほのぼのふぁーむ」ですが、伊達の農場は大赤字で、私の退職金も全部無くなりましたし、家内の退職金ありません。今あるのは借金ばかりです。「ほのぼのふぁーむ」は経済的には上手くいっています。経済的に上手くいっても農業はダメです。偶然知り合った会社の社長が「先生、面白いことやっているから金出してあげる」と言ってきました。最初は「ありがとうございます。ぜひ伊達の農場に出資してください」と言つて、伊達をまず完璧にしてから道内の数カ所に拠点を作り担い手を育てたいと構想を話しました。ところが社長は、伊達の農場を見て、札幌からちよつと遠い。年齢が嵩んでいるものだから、もつと近くはないかというのです。出資した以上時々見に行きたいと言うのです。「期待をさせておいて上手いこと言つて」と思いながら、

私はもう諦めていたんです。その後、先生が居た岩見沢ぐらいならいいんじゃないかと言い出したんです。「先生が指導してくればお金は、全部自分が出すから」と言うんです。私は「伊達の方が赤字ですから、それを解消しない限りこちらの方は無理」と何回も交渉したのですが、「赤字のほうまで何で俺が埋めなきゃならないんだ」と（笑）。交渉決裂。

しかし、彼は諦めきれず、私の所に接近してきます。最終的には岩見沢を成功させてその利益を伊達に回してやろうと思つて（笑）始めました。しかし、会社の社長というのは、何を考えているのか分からない。

土地を買うとか、住宅を建てるとかは黙つていくらでもお金を出す。農協もそれを分つていて、私に直接言わないで、社長のところへ電話して買わせる。そんなやりとりで、だんだん面積が増えて、今三〇haぐらいになりました。だけど付き合つていくうちに、税対策もあるのでないかと思うこともあります。その辺は定かではありません。この農場は有機で野菜を栽培。JASの認証も取っています。ブルーベリーやハスカップを作つており、将来的には観光農業に結びつけばいいかなと思つています。

研修生は二名おり、その他に賄いをする人、農業をリタイヤして研修生の指導と経営の中心を任されている夫婦。それぞれに、社長が月十五万円払います。国から借りなくても、その社長が毎月の給

料をくれるわけです。恵まれています。

4. 若者の実態と現代社会の問題

今日の本題の若者の実態です。私のところの学生もそうですが、付き合つてみると「何かやりたいんです。しかし、あまりにも体験不足だから、やることが分からない。例えば「先生のところへ行つて研修したい」と言うから、「ああいいよ」と言つて受け入れるんです。農業は朝早く起きることが大切です。そして、毎日朝五時にはみんな起きて仕事開始ですが、それが起きられない。経営を任されている連中は「先生、いつまで経つても起きてこない、話にならない、こっちは迷惑だ」と言う。「ちよつと待て、それと言つてしまつたらおしまいになるから、もう少し様子を見よう」と。私が土曜日・日曜日等農場に行つた時に、いろいろ話して、激励してやると「頑張つてみます」と。そしたら次の日は起きてくる。二日目になつたらまたダメになる。なかなか馴染めない。馴染めないのは当たり前です。六時くらいから若いのがみんな集まつてきて、ミーティングで今日は何をやるかという打ち合わせをしている。その子は遅れたり休んだりするから内容が分つていない。挙げ句の果ては、先生の農場は八時から五時までと規約には書いてあります。それ以上やれば労働基準法に違反する。「そうでない。農業というのは朝早くから夜遅くまで、陽があるうちは働くのだ」という話を

するんです。しかしそれが分からない。それを放ってしまったら後はおしまいです。なんとかこつちを向かせなければならぬというような時代になってしまったということですね。

このように、今の若者、いろいろなタイプのものがおります。しかし、将来を背負って立つ若者の数がどんどん減っています。この中から何人かでも農業者を継ぐ者が居ないと農業は成り立たないのです。

今、ニートが八〇万人を越えたといわれています。こんな若者達が私たち高齢者の面倒をみるようになります。ニートだなんて言うていられないと私は考えています。ですからこういう人たちをどうやって働かせるかということが、これからの課題ではないかと思えます。わたしも若い頃から役場や農協に行つて、町長さん、組合長さんにも「将来若者が農村から居なくなる」話しをしました。「そうだ、後継者って大事だな」と言います。しかし、実際は担い手養成には力が入らない。何故か？教育というのは目に見えないからです。だから、どちらかというところ、経済活動にばかり走つて、こんな結末を迎えてしまった。今後は、こういう人たちをどうやって育てるかということ、みんなで本気になって考えなければならぬと思つています。

今日も新聞社の取材が来ていまして、担い手不足はどこに原因があるのかという話になりました。若者はやりたくてもやることが分

からないから、そういう人をこちらから見つけて声掛けをやらなければならぬ。もう一つ農業の研修は、研修生・実習生の持つ得意分野から入らせることです。ところが農家の方はそれが分らないです。オールマイティで経営者は何でもやれるわけです。経営者の方針でやらなければダメです。それは当たり前です。損を分つていて自由にやらせる。そんな馬鹿なことはやらせません。ですから、そこへ入つた仕事の出来ない研修生とはトラブルが起きるので。私も苦労して育てた子を、この間、農家にお願ひしました。この子なら大丈夫だろうと思つていましたが、たった二カ月でアウトです。もつたいたいなあと思ひました。しかし、農家の人にしてみれば「なんだお前、あれだけ先生のところで研修やってきて、これだけしかできないのか」と、イライラが溜まるわけです。そしてある日「ちよつと来い」と言つて、日頃の鬱憤をバーンとぶつけてしまふ。そうなつたらもう処置無し。「何を言つても、ここには居られません」。「おい、ちよつと待て」手遅れです。受け入れる側に責任があるわけがありませんが、そんな子どもの実態を把握して受け入れなければならぬ。自分の若い頃と時代が違うことを認識して、研修生を受け入れなければ無理かも知れません。指導する我々にとつてこのことは一番大事な部分ではないかと思われまふ。

またこんな問題もあります。現在は、異常気象、地球規模で食糧難、それから物価も上がっています。特に化石燃料です。今度は肥

料も農薬も上がります。生産費がドンドン上がって経営を圧迫します。それから、農業ばかりでなく他の産業も人手不足です。この不足の人材をどこから補うのかという問題があります。それから、今の日本社会、子どもたちから見て結構無責任な大人が多い。国や地方行政でも矛盾した事ばかり。今の子どもたちを育てる場合は、こういうものを解決してかからなかつたら、なかなか上手くことが運ばないのではないかと、日頃自分でやってみて危惧しています。ですからこれを何とかみんなで考えて、そして若い人たちが農業をやり始めた時に、みんなでバックアップしていけるような体制づくりをしていきたいと思っています。我が、栗沢の農場のように、あまり面倒み過ぎもダメです。私は、道北のある町に二人ほど担い手を送り込んだことがあります。新規参入を初めて受け入れたこともあり、役場、農協、地域みんな大喜びして、大事に、過保護に育てたのです。あまりにも過干渉でいやになり飛び出しています。

5. 研修生・実習生の実態

研修生は、ちょっと大げさに言えば、どんな若者でも、希望に応じて何とか育てなければならぬということです。挨拶ができないのは当たり前。こつちから「おはよう」と言えばようやくポソポソと返事が返ってくる。目的がないから、朝起きられない。朝ミーティングしていても、その子だけ聞いていない。仕事が始まった時

に「誰々君、あそこのハウスからトマトのアイコ苗運んで」と言いつけられる。ハウス内は全部トマトなので、何番目にそのアイコという品種があるか分からない。それから種蒔きを一緒にやっても、「これは何の種か」という質問もしないから、要領も当然分からない。それから対話が苦手です。特に異年代との対話が出来ない。

実習を引き受けた農家の人からこんなことを言われたことがあります。獣医科の学生が二年生になったら農家へ酪農実習に行きます。農家の人からいつも怒られている。挨拶ができない。朝、起きられない。言われたことしかやらない。挙げ句の果て「将来は何になるの」「獣医」「獣医になるのだつたら、牛を知らなかつたらダメだろう。」「いや、僕は犬・猫が専門です」と。だから牛なんか学習しなくてもいいということです。

そんな状態ですから、勿論、忍耐力もありません。それでもお金が欲しい。私の農場は入る者、出る者拒まずですから、出ていく時に私のところへ来て「今まで働いた分の賃金ください」と言うので、「お前、何働いた？こちから請求書出したいぐらいだ」と言いますが、そういう権利だけは主張する。

6. それでも担い手を育てなければ

— 研修生・実習生の自立支援を —

そんな子でも担い手に育成していかなければならないと私は思っ

ています。今の時代は高校・専門学校・大学を出たからと言っても担い手にはほど遠い。であるならば農家に行く前に、先ほど指摘した様なことが事前に解決出来るシステムをつくってやらなければならぬのではないかと思えます。「そこまで俺らがやらなきゃならんか」という話になります、それをやらなければ担い手は生まれぬという事です。これが一つです。

次に、現在の新規参入制度では担い手は育たないと思っています。独立する時に借金があまりにも多過ぎる。或いはお金を持っていないければ農業者にそんなになれない。しかし、若い人に多額の借金なんか背負わせられない。私も自分でやり始めた時に、こんなに借金を持つとは夢にも思いませんでした。ところが、ある程度の施設・設備も必要です。おまけに伊達は北海道一土地が高い地域です。そんなところに若い人を入植させて借金なんてさせられません。そんな実態ですから、農協へ行って、新規参入でやると言ったら、十分対応もしないでいる程度のお金が有ればゴーサインを出すので、殆どの者は定着しないで出ていくのです。参入者は自分のお金を使い果たしたらそれで終わりです。その後、借金や土地の後始末に農協が走らなければならない。そんなことにならないように、何とか支援体制を改善していかなければならないかと思えます。

もう一つは、農家の教育力を高めなければならぬ。自分の経営方針だからこれをやれという時代はもう終わりました。その子が

持っている得意分野から入って関心を持たせる。例えば、パソコンあるいは機械が得意な子は、その分野を担当させ徐々に経営技術に入っていく。そういう体制をつくってやる。そのために、受け入れてもらえる農家を教育しておかなければならないと思えます。それから、農業者自らの課題を解決して条件を整えることが大切です。これは当たり前前で、化学肥料や農薬を山のように使って、農業の後継者を育てるといつても無理です。例えば、肥料が高くて使えないのなら、それに替わるものをみんな考えて知恵を出し合って経営を行い若者に見本を示す。それが農業者としての努めでないかと思えます。

①人間性の基礎・基本を養成

まずその条件整備です。人間性の基礎・基本を養成するという事では、体験農場での訓練をさせるべきだと思っています。

今の北海道の農業高校は、だいたい体験までではできています。農業大学校あたりも大分進んだと思えますけれども、その後、特に大学教育ではほとんどやっていません。酪農学園大学も、そんな体験をさせる農場は一つもありませんから、私は体験農場をつくったほうが良いという提案をしています。大学はなかなか「合意」してくれません。大学・専門学校・高等学校で体験する場所を確保出来ていることが基本です。あるいは、市町村でそういう場所を若者の

ために設けてやるということが重要だと思います。そして、学校と農業者の連携で、在学中に農業体験ができるようなシステムをつくっておかなければと思います。そんな話しをしますと何処の市町村も農業振興公社を作つてやっていると云います。

あの振興公社が成功してどれだけの手が確保できたでしょうか？私は疑問です。それこそもつと知恵を出し汗をかかなければ行政や経済団体の天下り先になつてしまう。

酪農学園大学も酪農学科はようやく半年間農家実習に行き、帰つてきて半年間勉強する。次の年、また半年間行き、また半年間大学で勉強するというふうになりました。これも希望するのは、まだほんの一部です。多くの学生がそういうことをやれるようにしていくべきだと思います。非常に良い体験ができると思いますが、その前に、大学はやる必要があります。実習の前に人間として、また、農業の基礎基本を身につけてから実習に出させないと農家と信頼関係がなくなります。

私は「風のがっこう」主催で、北海道以外の高校生を対象に、私のゼミ学生が中心となり、企画して夏休みに農家体験「高校生サマーアグリキャンプ」をやっています。これはすごく人気があります。本州から来る子どもたちは、農業高校生もいますけれども、普通高校の生徒が多いのです。その普通高校の生徒たちは「農業ってこんなに大変なんだ、こんなに楽しい、こんなに大切なんだ」とい

うことが分かる。更に、良いことは、これを体験した高校生は殆どうちの大学に入るのでから、こんな有難いことないと思うんです。そして学生も指導力がついて勉強になります。

今の農家の方というのは、皆さん簡単に研修生を受け入れてくれません。煩わしいからです。けれどもそうではなくて、まず、学生が行つて実習をさせて貰い、信用を得る。「そうか、お前が付いて来るのなら受け入れても良いよ」となります。大学生一人に高校生三人から四人を引率して、そこで体験をする。彼らは高校生の裏方に徹するわけです。農家の立場になつて指示を貰いながら高校生の指導は厳しいものがあります。信用も得て段々その農家と仲間になり、実習への理解者を増やしていく、そんなことが大切ではないかと思つています。

それから受け入れ機関とか団体では、組織を強化して援農隊を編成する。私も伊達で農業を始めて野菜などは有機栽培を目標に始めました。しかし除草剤を使わないものだから、今まで見たこともないような、草が生えてきます。それから虫も病気も全部棲みやすい私の農場に飛んで来ます。周りで有機に挑戦している人は一人もいません。ですから虫や病気の集中攻撃に遭います。こういう場所では、なかなか有機栽培なんていうものではないということですから、労力がすごかかります。そこで、労力は援農隊を編成するしかないのではないかと思うんです。農業をやりたい、体験して



みたい、農業を手伝いたい、という人が都会には沢山います。

そう言う人が、私のところには札幌の女性の方もいるし、室蘭にもおられます。特に、室蘭の人たちは年齢も高いですから、月に一回日曜日の、ご主人が休みの時に車を出してもらって来てくれます。

「草取隊」という名前です。草を取りたいと言って、農業のところへ来て応援してくれるのです。草取りの後、経営主や研修生と懇談したり、農業のノウハウを勉強することによって、単なる作業でなく、もっと高度な農業の理解者になればよいのではないかと思います。私の仲間の、当別・新篠津・江別・恵庭だとかの農家の人たちも、やはり手が足りなくて困っています。心が通い合うような都市と農村の交流が芽生えてこそ素晴らしい社会が構築されると思っています。

②就農支援体制を改善する

それから就農希望者に多額の借金は無理だということです。指導機関はもっと本気になって、新規参入を育てるようなことを考えてほしい。それからもつと自由に訓練ができるような体制づくりができないのかなということです。受け入れてもらった農業者に丸投げしておいたら、やはりダメだということです。しよつちゆう顔を出して、そういう人たちがどういうふうになっているかということを確認し、面倒見ていくようにしないと農業者というのはなかなか

育っていないのではないかと思っています。

受け入れ農家の教育力を高めるには、やはり法人経営が理想です。個人経営だとなかなか難しいのではないかと思いますので、できるだけ法人経営にしていかなければならないと考えます。労力だけを確保するのではなく、研修・実習で子どもたちが本気になって勉強になるような環境を作ること。農業というのは単純作業の繰り返しですけれども朝から晩まで同じ作業でなくて、いろいろなことを体験させてやるということが大事ではないかと思えます。指導力のある人が受け入れ農家になるべきだと思います。

③受け入れ農家の教育力を高める

私は、指導農業者でも何でもありません。市役所や農協へ「もう、六年も経ったから、私の農場で正式に研修生を受け入れシステムにしたいので、その準備にかかって良いかな」と私が話しに行きます。市役所の農務課でも農協の営農部でも「先生、どうぞ進めてください」と言ってくれる。研修生に「農協と役場に行って手続きしてください」と言ったら、「何、考えてるんだ、先生のところへなんか行って勉強になるはずないだろう。借金が多く、土・日しか伊達に居ない。そんな所では勉強にならない。推薦してやるからこつちへ行け。」それで、推薦先の名前を見たら、後継者がいなくて高齢で労力を欲しがっているところばかりです。そんなことでは担い手

は育ちません。この間、農水省へ行って話をしていたら、その課長いわく「最終的には、借金をいっぱい背負っている人のほうが、農業のことを分かっている。」私と意見が一致しました（笑）。それで補助金くださいと言ったら、返事してくれませんでした（笑）。

指導をきちんとできる人、農家を選ばなければダメだということです。それから農業者の経営方針や問題点、改善点を明確に研修・実習生に分かるような訓練をしてほしいと思えます。思い付きで言ったり、作業の指示では誰も付いていきません。農家にとっては、煩わしいことですが、そういうことをやって欲しいと感じております。

7. 北海道農業の課題

―農業の課題を解決して条件を整える―

私が自分で農業経営をやっているなかで次のような問題があります。

まず化石燃料の問題です。もう大変です。これに代わるものを発見・開発していかなかったら、若い人が農業経営をやっても無理だろうと思います。おまけに戦後、農業はビニール革命がありました。ビニール製品がなかったら、今の農業は成り立ちません。それを考えると、化石燃料の代りになるものをちゃんと作らなければならぬということです。それから、市場ではもう対応できない。作れば

安い、お金が回らない。農地が荒廃しています。それから安心・安全・うまいが、安定的に要求される。世界的に異常気象です。それから飼料・肥料・輸送、生産費がいくらでも上がっていく。

先ほども話しましたが、牛を一〇頭、鶏千羽飼っています。餌代が前の年は三一五万円ぐらいでした。それが去年は五二〇万円です。今年はずっと上がります。それで「放牧や自給の餌を」考えています。と言っても、そんなに簡単に放牧の事が分かるわけでもありません。この間、黒澤常務の薫陶を受けた普及員の方にお逢いました。その方に放牧の勉強をさせて貰い更に農家も案内頂きました。しかし、一回や二回聞いてもすぐに放牧なんかやれるものではありませんが、そういうものにいち早く転換できるようなことを考えてやらなければいけないということです。

こういう問題が次から次へと起こってきます。これらを解決してあげないと、農業者は育つていけないと思っています。それらについて、次に話したいと思います。

①化石燃料に変わる燃料の開発

代替燃料を開発する。これは皆さん色々やっておられます。これをもっと早くから取り組んでいなければならなかったのに手を抜いていたのです。今、これを解決しなければ、絶対に農業というの成り立たないと思っています。わたしのところは代替燃料の試験を

やっています。産廃業者がバイオディーゼルの油を精製して、最後に残るのはグリセリンです。ところがこのグリセリンにはカスがいっぱい溜まっています。従って、これだけでは燃えません。工業試験場がノズルを開発して、製作所がその権利を持っていました。

そのノズルは液体なら水以外何でも燃焼させる。たまたま、産廃業者組合の総会があり、私が講演に行っただけです。「これからの時代廃棄物を農業に活用することを考えて行かなければならない。何か有れば提案して欲しい」と結びました。終わつたあと協会の会長さんが私のところに来て、「先生、あるよ。グリセリンはどこも使えないからドラム缶に入れて積んである」「製紙工場が、燃料に使っているだけだ。だから余ってしまうが、これを燃やすようにすれば面白い」ということになったのです。「それ、私にやらせてください」と言って、試験場と製作所を紹介してもらいました。早速、その製作所を訪ねてグリセリンを燃焼したいと相談しました。

そして、今までの暖房機のノズルを換えて、やり始めましたが燃料が堅くて上手く流れて行かないのです。産廃業者のところへ行って相談しているうちに、アルコールを混ぜてみたらと言うことで、純正部品を消費するアルコール純度九八%です。要するに部品を洗うのに、一回使ったアルコールは二度と使えないのです。これも使えない道がなくて積んでありました。これと混ぜたらいいのではないかということになったのです。この二つを混ぜて試験をしたらス

トープの中は若干のカスが溜まりますが燃えるようになりました。まだ、十分では有りませんが、更に研究を重ね運び賃にリットル当たり二〇円は大変な魅力です。また、六年前ですがいち早くナタネの栽培試験もやりました。良い品種を使うと本当に収量が多い事が分りました。これは面白いなと思つて、東北農業試験場へ行つて種を貰つて本格的にやろうとしたのですが、食料の燃料化は少し抵抗を感じているので今は大人しくしています。

② 作れば安い、お金が回らない

それから、作れば安い、お金が回らないということですが、これは非常に大きな問題です。先ほども話したように、市場出荷の競りは先ずダメですね。花の競りを紹介しますと、今までは北海道の場合、競りにかかる一日前に集荷に来たのです。そのトラックに乗せてやると、夕方市場に並べて、次の日の朝の競りにかかります。ところがこの競りが最近、自由化になりました。今度は相対が増えるようになりました。市場では更に一日前に集荷に来るようになったのです。競る一日前で相対取引。従つて、前々日に私のところに集荷に来ます。次の日は相対業者が来てそこで物色するわけです。声が掛かつて売れたものはこちらの思う値段です。ところがその日に声が掛からなかったら、もうおしまいなんです。残つたものは、競りになるんです。「はい、ナンバー」そうしたらもう二東三文です。

業者は前の日にもう腹一杯になっています。市場に出した以上は、残り物でも競らなければならぬから競るわけです。それが二東三文になるわけです。珍しい花だとか良いものを作つて、前の日に売れた人は問題ありません。だけでも売れない人がいっぱいいます。これからは、相対をどんどん増やすようなことを考えていかなければならない。そうなるのと直接小売店だとかホテルだとかあるいは食品会社だとか、そういうところと取り引きしてやつていかなければならないということなんです。

③ 消費者との連携を深める＝信頼関係を創る

もう一つ大事なことは、消費者との連携を深めるということで、直売がずいぶん増えてきました。農家の庭先にもずいぶん直売所があります。毎年どんどん増えています。しかし、ただ直売をやるだけなら止めた方がよい。都会の人たちは体験を望んでいるわけですから、体験のできるような直売でなければならぬと思っています。あわせて子どもに農業の体験をさせる工夫が必要と考えます。また、試験場、種苗会社などから新しい種子や変わった栽培法なんかも役立ちますので、そういうものを手に入れて、普及させていくということも大事ではないかと思っています。

月一回、私が代表になって「北のめぐみ愛食フェア」というのを、道庁赤レンガ前でやっています。お陰さまですっかり定着し、バイ



愛食フェア

道庁赤れんが前広場は人気があり出店者多い

ヤーも少しずつですが来るようになりましたし、直接消費者と取り引きして配達する人も出てきました。企業や関係団体の方にも応援いただいています。道からも補助金を貰っていますので、これが定着していけばいいなど。何回もやりたいのですが、道は「一つの団体だけには貸せない」と言って、ひと月に一回だけです。しかし、「第一次産業の農業、漁業を発展させるために、もう一回多く貸してください」と言うのですが、「道民みんなのものだから」ということなんです。今日は大分偉い人が居ますのでご理解頂いて、再交渉に望んでみようかとも思います。お陰さまで先月は二日間で六〇万円ほど上がりました。ですから結構お金にもなる。ただお客さんが来ないと、出店者がぶーぶー言います。それで私のせいになる。「それは我慢してください。ここは、お金儲けも大事だが自分の商品のPRする場とってください。」と理解を求めますが、なかなかその辺をわかってくれないですね。

④農地が荒廃

それから農地が荒廃します。高齢化で担い手がいまさんから、これはもう仕方ありません。ですからこれをどうかしていくかです。私は、認定農業者の様に土地を交換分合させて一人の面積を増すの必要ですが、地域の農業以外の人だとか、都会で住む人たちと一緒に耕して、いろいろな人が体験できるようにしてあげたらよいの

ではないかと思っっているのです。認定農業者にどんどんやらせてみても限界です。株式会社ではまず無理だと思えます。そういう人たちがやれるような農業の体制にしてほしいと思っっています。だけど農地が荒廃しているからといって、燃料作物を作るのも一つの方法かも知れませんが、世界的に言うときまだそこまでは無理なのではないかということがあります。ですから当然のように農地を守つていかなければならない。それなら、輪作体系を確立して土壌改良剤をきちつとし、新規参入者や農業に興味関心を持つ人に貸与する。しかし、そこには問題があります。ただ、貸与するのでは農地もメチャクチャになってしまいます。その辺を整理してかからなければなりません。

⑤面積が増えた

一戸当たりの面積が増えたら、当然のように機械化されて、化学肥料や農薬を使うようになります。そうすると、今の時代に逆行する事も事実です。しかしそういう人もいなければ困ります。十勝等の大面積地帯は大規模経営をやらなければ農地保全も食料自給率も上がりません。大面積を持つている人には出来るだけ経費をかけるので安心安全に向かった農業の方向で実践して頂きたいのです。せめて、自分の所から出した糞尿や作物の残渣を自分で処理して経営をやつて行くことが大切だと感じています。

そして、農村には、都会にない良いものがたくさんあります。これを何とか、みんなで保存していくようなことを考えていかなければならないのではないかと思います。伝統行事だとか伝統食が、高齢の方がいなくなつてしまつたら、「それがなくなつた」というのは寂しいわけですから、何とか持ちこたえていくようなことを考えていかなければならないのではないかと思います。

⑥安心・安全が要求

それから安心・安全が要求されます。そのために、化学肥料だとか未熟堆肥を投入しているようでは話しになりません。硝酸態チツソが散乱、重金属流亡の危険が背中合わせしてしまいますから、何とかこれを食い止めなければならぬと思っっています。そのためには土壌改良が一番大事なことではないかと思えます。昔の堆肥づくりのようなものをしていかなければならないのではないかと思います。私も今まで、相当数の堆肥を作る業者に騙されてきました。結局は言つていふことと実際に出来たものでは全然違い信用ならない未熟で土の中で再発酵したり、堆肥が炭化されていたり本当にいい加減です。そんな時、私の子どもの頃の堆肥づくりを思い出しました。そう言えば我が家は、堆肥の切り替えをしていないのに春先には腐植堆肥ができて馬そりで積んで水田に撒いていたが一つも臭いが無かつた。何だろうと調べたら、パチルス菌、即ち、納豆菌だと

言うことが分つたのです。そんな堆肥を作っている人を捜して、一緒に開発を始めました。そして良い物ができました。「さあ、どうだ」と農家へ持って行きます。若い人を集めて説明します。若者が乗ってきます。「先生、一緒にやりたい」と言います。まず試験してみよう。結果、良好な成績を収めることができた。「よし、本格的にやるぞ」と親父さんに話す。「お前、またごまかされるのか。堆肥で今まで何ほど業者にごまかされたか分からない。いくら先生だからと言っても信用しない。止める」ということになってしまう。しかし、これからの農業は土壌改良無くしては成り立ちません。北海道は余りある糞尿の解決が大きな課題です。これを土壌改良材に変換したときにとってもない大きな農業の前進に繋がると確信しています。

⑦これからの農業は

最終的に、これからの農業というのは、身近にある自然のエネルギーを活用する。安心・安全・旨い・きれいな物を安定的に生産する。二酸化炭素を減らし温暖化を防止する。当り前のことですが、こういうことが大事になると思っています。先ほど話した堆肥づくりは、昔のやり方と同じです。稲藁と家畜の糞を交互に積みました。そしてその稲藁が納豆菌でバンバン発酵します。そうすると適度な空気が入り、切りかえがいらなかったんです。私たちが子どもの頃

は、稲作農家で堆肥を切りかえている人なんか一人もおりませんでした。そんなことをしなくてもきれいに腐熟してくれたからです。それが今は牛糞等では特に水分が多い為に切り返しを何回もしなければならぬ。温度も一〇〇℃以上にもなり炭化してしまう。

我々は以上の事をヒントにしながら試行錯誤の繰り返しで堆肥づくりに挑戦しました。従って堆肥の発酵温度も六五℃で安定します。炭化はしない。土壌が団粒化され生育が良くなる。重金属を固着する。地下水の汚染を防止する。当然、虫だとか病気もないし、鳥も飛んできませんので非常に安心です。理想の堆肥ができたので、何とか普及していこうと思っています。

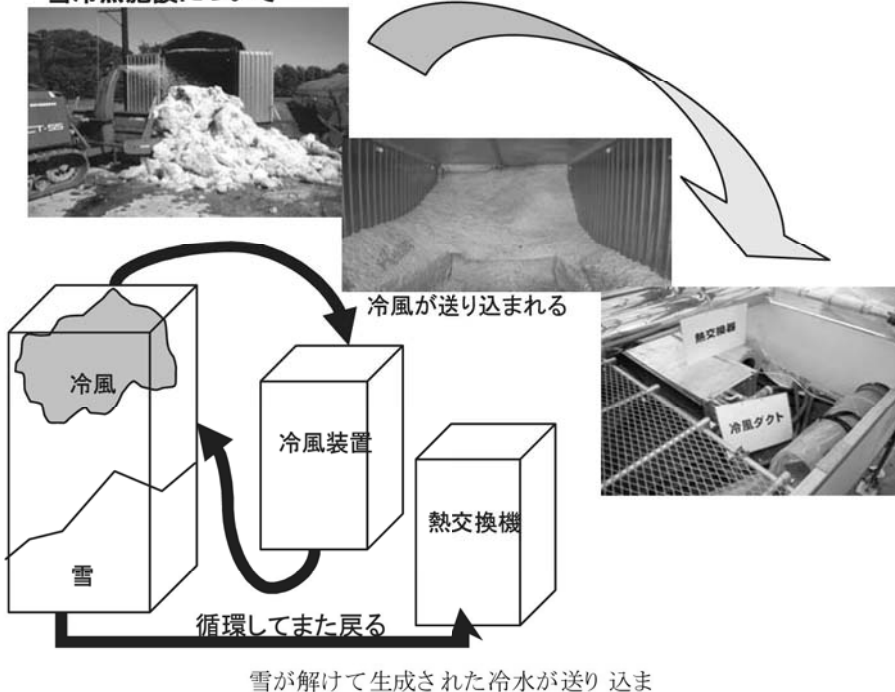
作り方は、カツセー工法といいますが、樹木チップ、建築廃材。牛に踏ませるような大きなチップは不可。粉碎機で細かくし、納豆菌を入れて、そこでまず活性チップ材を作ります。その後、カツセー鶏糞を入れます。これは発酵、リン酸を確保するためです。パルス菌の液を作ります。三層にしてあります。その液とカツセーチップを攪拌します。その後、牛糞だとか馬糞だとか食品残さを入れ、二から三日で発酵温度も六五℃に安定します。約二週間で製品になります。静内で作っているんですが、伊達でもやりたいと思っています。現在、道内に拠点をつくって行きたいと考えています。雪冷熱施設は、私が岩見沢農業高校にいた時、雪を使う方法を考

えました。岩見沢は豪雪地帯。雪を使うことを提案しました。若い人たちが農業経営をやるには、夏の間雪を活用することが非常に大きなメリットになるのではないかと思います。

これは試験場に指導いただいて、寒じめほうれん草を、私が一番先にやらせてもらったのですが、これは非常に上手くいきます。値段も高い、暖房もいらぬ。結構良いですね。ただ雪の多い所はハウスが雪の影響を受けて問題かも知れませんが。私の所は雪がほとんどありませんから大丈夫です。九月の下旬に種蒔きをします。そして十一月の下旬でほしい三〇cmぐらいの大きさになります。それからハウスを全開にするんです。そうすると、今まで立っていたほうれん草が寒さでスライドのように全部横に広がるんです。これで糖度がのり始めます。この時の地温が五℃で、五℃以下になってから二週間経つと、糖が完全にのります。一番高い品種は「まほろば」といって、糖度十八度になります。スイカやメロンよりも甘いということなんです。だからおひたしなんかだと食べられない。他の品種でも、ほしい糖度十二、三度にはなります。

難点は、冬に収穫しますから寒くてバリバリ折れる。だから折れないようなことを考えなければなりませんが高売れるので期待をしています。何倍も高くはありませんが、暖房を使わないわけですから生産費が安く抑えられます。例えば、冬にミズナを作ると温度を〇℃に保たなければならぬので、結構暖房費がかかっている。

雪冷熱施設について



ただ露地で作っている東北物だとか関東物が二月になつたら出てきます。そうすると負けてしまいます。ですから北海道は、その前に勝負して終らせるということです。去年、一〇aで一〇〇万円ぐらい上がりましたので、結構なものだと思っています。

時間が来ましたので終わりますが、いずれにしてもこれからの農業というのはやはり若い人たちに期待をしなければならぬ。若い人たちに期待をするということは、熟年者を活用するという事です。そして彼らの持つているものを、若い人たちに受け継いでいってもらう。そんな農業が、私はこれから大事だと思えます。そして少しでもゆとりを持って農業経営をするということが必要ではないかと思っております。私もまだ志半ばですから、何とか自分の経営が軌道に乗ることと、若い人たちをこれから育てて、北海道の農業の発展のために応援団として頑張っていきたいと考えております。少し尻切れトンボになってしまったのですが、この辺で終わらせていただきます。どうもありがとうございました。(拍手)

質 疑 応 答

和田 先生、本当にありがとうございました。先生の豊富な体験を、一時間半程度の短い時間の中で凝縮するというのは、非常に

大変なことだと改めて事務局員として反省しております。折角の機会ですので、ここで若干お時間をいただいて、質疑の時間をとらせていただきたいと思えます。ここで進行役を、私どもの研究常務の黒澤にバトンタッチをしたいと思います。

黒澤 研究担当をしている黒澤と申しますが、今回長谷川先生に講演をお願いした首謀者の一人です。ずっと以前から、先生とは友だちとしてお付き合いをしていただけていました。私は道庁に勤務していましたので、仕事の担当で担い手育成の問題がありました。まだ先生が岩見沢農高の校長だった頃ですが、担い手育成の検討委員会というのがあって、担い手をどう育成していくかということで道の施策としていろいろ検討しました。その中には、例えば農大の教育のあるべき姿だとか、現場の普及センターでの担い手育成の問題だとか、道の担い手育成センターのあるべき姿みたいなことを協議しました。そんな委員会の中で、長谷川先生に委員として出席をさせていただいて、その豊富な知識と体験から助言をさせていただいたのです。その時の私の率直な感想は、規格外の教員というか、一つの枠にはまらない非常に自由な発想をされる方だということです。先ほど、大五郎を傾けながら話をすること聞いて、先生の人間性そのものを出した形でのお付き合いをさせていただいているのが表れているなど感じました。

先般、網走のあるブロックの農業生産法人をつくった方々が、自分たちの自主的な勉強会で、どなたか講師を呼んで勉強したいというところがありました時に、私は長谷川先生をご紹介したのです。その時、先生の経歴から担い手問題や野菜の専門家かも知れないが「黒澤さん、酪農に関連する話題は大丈夫だろうか」とえらい失礼なことを言うので、私は「先生はオールラウンドな人材で、しかも酪農の本場の標茶の農業高校の校長もやっていて、酪農家の方々の実態もよく知っている方だ」ということをご紹介したら、「ぜひお願いします」ということでした。そして先生には非常に多忙な中を現地に駆けつけていただいて、しかも一泊していただきました。後で、呼んだ酪農家の人たち、あるいは現場の普及センターの人たちから「非常に良かった」、尚且つ「昼間の話も良かったけれども、夜の話が非常に良かった」という感想をお聞きしました。

まさに私どもの司会の和田が言いましたように、大変多彩な経歴と、先ほどから皆さん方お感じだったと思うのですが、担い手育成の問題から今の日本農業が直面している課題、あるいはグローバルな地球環境問題、農法、新しい作物、作型、非常に多面的な話題を提供していただきました。時間が限られておりますけれども、ぜひ先生にこの辺を確認したいということ、あるいは意見を聞いてみたいということがありましたら、遠慮なく挙手をしていただければ有難いのですが、どうぞよろしくお願いします。

井上 今日個別経営のお話が主体だったのではないかという印象を受けました。報告の所要所に法人の意義とかお話をしていたんですけれども、これから厳しい状況の中で法人経営というのはポイントになると思います。北海道はやはり個別経営が主体で展開してきますので、今後それが重要なポイントになってくると思うんですけれども、先生がお考えの法人化の意義とか、法人化を進める上でのポイントを簡単にお話いただきたいと思うのですが、お願いします。

長谷川 私も法人化は何か良いのか分からないのですが、一つ良いことは、会社ですからいろいろなところの作業分野が出てくるということなんです。ですから一つのことをみんなで作る時もあるけれども、その得意分野をその人に任せることができる。これはすごく大きなエネルギーだと思えます。そうすると、自分は任されたからそれに向かつて責任もつてやれる。また、研究もする。だから生産法人が良いかなと私は考えているんです。その他の一般的な税だとか何とかということはあるんでしょうが、私のところはまだ税金を払えるような立場ではないので、そういうメリットは何もないです。しかし、人を扱う時には絶対に法人は必要だということ。特に、研修生などは、すごく自信を持って仕事ができる。そうすると今度は他の分野もまた自信に繋がるあるわけです。例えば野菜が得意な分



野の子がいるし、花の得意なものもあります。そうすると一緒に仕事を
した時、「野菜ってこうやるのか」あるいは反対に「花ってこうな
んだ」、「牛はこんな特徴を持っているのか」と、勉強になるわけ
です。

それと同じように、機械でもパソコンでも何でも広めていく為に
は、お互い切磋琢磨させることも良いことだなと私は思っているの
です。ですから私は無理して共同作業をやらせないのです。どうし
てもやらなければならぬ時は、一気に解決する作業だけにしてい
ます。そうすると、任されたものだから自分で真剣になって取り組
むので良い結果に繋がると期待しているからです。反面、明日から
出荷だという時に、ハウスの植物全てを枯らされたこともあります。
農薬の散布の失敗です。さすがに、その時は泣いても泣き切れない
ぐらい苦しかったのですが、怒るわけにもいかないから「二度と失
敗しないように、これからまた頑張らなきゃ」と言ったけれども、
内心ハラワタが煮えくりかえりました。一人ひとり信頼関係を結ぶ
のは、法人化してやるのが一番良いのではないかと思っていますの
です。

黒澤 それでは会場でいかがでしょうか。はい、どうぞ。

太田原 先生が時間がなくて端折られた部分なのですが、政治や

農業団体を上手く活用するところを、お話いただきたいと思うのですが。

長谷川 悪口になるので怒られるのではないかと思うのですが、やはり農家の人というのは、特に、役所だとか農業団体の活用の仕方が下手だなと思うんです。企業の方などと付き合っていますと、凄く上手ですよ。どんな人材がいてどう活用したら良いか非常に詳しい。また、課題の進むべき方向なども手に取るように分かるんです。ところが農業者の人に「それ、どうなの？」って言ったら「役場と農協」と言う。そうではなくて、それぞれの分野で、支庁もあるし道もあるし国もあるわけです。そういうところに行つて、何でも関係あるものを調べたり、得てくるということがすごく大事だと思います。私はいつも怒られています。「すぐ先生は上のほうへ行つてしまう」けれど、相談に行つた人が分らなければそのままで終わってしまう。それは一生損してしまうことなら大変なことになつてしまいます。特に、農家の人というのは、お金の制度についてあまりにも知らな過ぎる。それを知っているのは、役場だったり農協だったりするわけです。そうではなくて、自分たちももっと勉強して、そういうものをどんどん使わなかつたらダメだと思えます。もう一つ、農家の人は借金していると弱いですよ。私は借金していても平気だから、結構どこでも怖がらずに行くんです。昨日も胆

振支庁から電話がきて、「先生、まだ改良資金払ってないよ。」と言われます。「分っているのですが、無いものは払えない」と言っています。そうすると、色々知恵を貸してくれます。そういうことを、もつと農家の人は活用すべきだと思うんです。

試験場でも普及センターでもいろいろな得意分野を持った人がおられますけれども、なかなか、農場まで出向いてくれませんか、こちらから行つて活用したほうが良いと思うのです。酪農学園大学は近くに、大麻の普及センターがあります。私がしょっちゅう行つて使うものだから気の毒ですよ。「学生のため、農家のため、これやつて、あそこへ行こう、ここへ連れて行つて」と言います。そうすると普及センターの人は一緒にやってくれます。私の講義を受ける学生には、「大学の先生の講義だけで学んではダメ。農協も普及センターも市役所も活用しなさい」と言っています。

今、プロツコリーの収穫が始まりました。それで農協へ電話して「朝五時にうちの学生連れて農家の手伝いに行くから、バス出して」と言っています。そしたら農協は大喜びですよ。そして朝、大学まで迎えに来て貰います。午前中いっぱいぐらい農家で体験してくる。こういうことも普及センターが繋いでくれるんです。そういうふうにして繋がっていくことが、人の成長にもなりますし、地域の繁栄にも繋がるのではないかと思うんです。

最近、普及センターは小学校の体験をやりませう。それから修学旅

行生を受け入れる時の指導もしています。「指導するのは、普及センターや農家ではダメだ。うちの学生がやります」と私は言っているんです。小学生の田植え体験、稲刈り体験、草取り体験の時は、学生が指導者です。学生が先生のほうが小学生や中学生は理解度も早くなります。しかし、事前学習は普及センターや農家の人が勿論先生です。

黒澤 はい、ありがとうございます。今最後のお話の中で、農業者の方々が情報を獲得する手段として、まだ現実には弱い部分があるというお話でした。私も先日、あることをちよつと書いたのですが、農業者の方は、欲しい物があつたらどんな策略でも手段でも駆使してゲットするという、そんなことが必要ではないかということなんです。提供するのを待っていて、誰かが提供してくれるというのではなく先取りで、それを積極的に取りに行くということが必要だということを感じました。先生のお話を聞いて、非常に心強い思いがしました。

時間の関係で先生が省略された部分の中で、研修のライセンス制度みたいなことで、級位の話がされていました。先生の頭の中にある研修だとか教育に関連して、受け手の側でそれをオーソライズする手段・方法について、もう少し具体的にお話をしていたきたいと思います。

長谷川 工業だとか商業だとかの関係では、いろいろな資格があります。それは社会的にも認められているんです。ですから、工業何とか資格一級というのはすごく大切なことなんです。例えば入札の時などには、それが点数化されている。こういうのが工業や商業や他の産業のは定着しているんです。ところが農業というのは、ドイツのマイスターだとか他の国にはいろいろなことはありますが、日本の国には農業の資格では何ありません。

農業高校には農業技術検定というのがあります。しかし、採用する人が見て「何、これ、誰が認めてるの？」という感じなんです。高校生だつたら、商業簿記・珠算・ワープロだとかあり社会的に認められている。ですから私は、前からおかしいなあと思っていたんです。資格を取ることによって、それを活用して、例えば農家に行って出面さんになる時に、この資格を持っていたら給料が高いというようなものがあつていいではないかと思つています。それがあれば働くほうも自信を持つて働けるし、農家へ行つてもいろいろなことがやれるのではないかと。農家の人も、安心してその人に仕事を任せられるのではないかと思つています。それを資格化したらどうだ考えたのです。

それで道の農政部の協力を得ながら、何とか踏ん張つて国から助成金を引つ張り出してマイスターまで養成しようと真剣になつて考えたんです。残念ながら農水省はダメだったのです。しかし、その

企画内容は、北海道内だけでも十分通用するものですから、それを何とか実践して農家の人と連携をする。ペーパー試験の資格というのは、今ブームですから山ほどあるんですよ。例えば商工会なども、フードマイスターなんてやっているでしょう。ペーパー試験でいくつ良い点数を取ったって、現実を見て分からなかったら何にもならない。現実のことが分かった時に、初めてその資格が生きるんだと思うんです。理論よりも実践を通してこれだけできたら初級、これだけできたら中級、これだけやれるようになったらマイスターというのを称号として与えて、それが農家に定着していく。そうすると農家のほうも、実習だとか体験で労力として使えますし、担い手養成の確認にも使えるわけです。何とか協力してください。

黒澤 ありがとうございます。それでは最後に会場からどなたかぜひ、今まで質問したのは全部地域農研関係者ですが、これは身内の講演会ではありませんのでぜひどなたか・・・それでは青山さんよろしくお願いします。

青山 担い手センターの青山です。お話を聞きまして、同じような仕事をしている関係で大変思うところがありました。資料の「それでも担い手を育てなければ」研修生・実習生の自立を支援」」というところですが、先生の今までの体験をまとめられている

と、大変感銘して見ていました。その中で「就農支援体制を改善する」というお話で、より具体的に課題の部分をもとめておられますけれども、課題解決の手法その方向性というものについて、これはいろいろと難しい問題も多々あると思うのですが、何点かでも先ほどの「就農支援体制を改善する」のさらに解説版のような、こういう方向で制度ができればいいのではないかとというようなお考えをお聞かせいただきたいと思います。

長谷川 ちよつと難しいですね。これをやるようになったら、何も苦労はいらないと思うんです。何とか良い方法がないかと思って、私も今本当に苦労しています。自分でこれを今後の研究材料にして、これからも少し頑張っていきたいなと思っています。ただ農家の人を選定したりする時に、その選定農家が非常に大事だと思うんです。はっきり言うと、指導農業者でもアドバイザーでも、国や道は地元の役場だとか農協に任せきりのような状態も結構あると思うんですよ。そうすると、自分たちと番号の合うような人が推薦されて来るのではないかと思うんです。私はそうではないと思うんですね。本気になって担い手を養成したいという農家の人も、たくさんいると思うんです。そういう人たちを発掘していくということが、すごく大事なことでと思います。そのためには、やはり農家の人と仲間になるということがすごく大事だと思って、私も今、伊達



では時間があれば農家のほうに走って行って、この農家は何をやっている人かを見極めながらその人たちと協力して後継者を育てて行かなければならないと思っています。

黒澤 どうもありがとうございました。青山さん、よろしいですか。今、研修の受入れ農家について、現行では指導農業士等の地域での先導的農家の方々に依頼をしていると。その方々の善意に頼っている部分もあるのですが、それ以外にも適格者はいらばずだと。そういう適格者を発掘する仕組みを、全員が共有する。そういうことが必要ではないかと先生よりご提案いただきました。

今回、先生のご講演の中では、単なる担い手の育成という狭い領域だけではなくて、教育システムから地域問題から、あらゆる北海道農業が直面する課題について非常に卓抜な意見を提起いただきました。今回だけでは十分論議を尽くすことはできませんが、先生はご承知のように来たる者拒まずでどんな質問でも、場合によつたら呼んだらどこまでもという感じで、「越後まで餅つきに」という言葉が最も相応しいという感じの方です。この講演会にご出席の皆さん方も、先生からまだまだ話を聞きたいということがありましたら、ぜひ先生をお呼びして先生の持っている全てを吸い取るということをお願いしたいと思います。

時間が若干オーバーしましたが、以上で地域農研の特別講演会を終わりたいと思います。多忙な時間、しかもご自分の失敗談も赤裸々に告白していただきました長谷川先生に、再度皆さま方の盛大な拍手をお願いしたいと思います。ありがとうございました。（拍手）